

新 刊

□徳久球雄・石井光造・武内 正（編）：三省堂日本山名事典（改訂版）. 2011. A5. 1,232 pp. ¥6,300. 三省堂. ISBN 978-4-385-15428-2.

国土地理院 1:2.5 万図に記録された、すべての山名と峠名および山と関わりのある地名を、漢字綴り、読み、高度、所在地、最寄り駅からの方向と距離、簡潔な解説、所載地図名、経緯度（秒単位）を付して、読み順に配列したもので、約 25,100 件の地名が集録されている。山の愛好者ばかりでなく、広く民俗、歴史、地名に関心を持つ者にとって、大変有用な作品である。初版は 2004 年に刊行されたが、その後全国的な市町村合併と行政区画名の変更・新称が行われたうえ、世界測地系の導入の結果、国土地理院地図の新図式による 1:2.5 万図の刊行が始まった。これを受けて、すべてのデータを見直し、とくに市町村名、経緯度などが改訂されている。...と簡単に言っても、二万余件を一々当たるのだから、誰にもできるようなことではない。とくに経緯度は、一々図上で計測したとある。神経をすり減らす作業だったことだろう。駅からの方向や距離も、鉄道の新設や改廃で、見直しが必要だったと思う。私も曾て、「駅の名所案内板を全部集めたら有用だ」と思ったものの、やり方を思いつかないまま棚上げとなっていた。

項目数は初版の約 25,000 件に約 200 件を追加し、開発等により平地化されたものは削除したと記されていて、「そこまで目配りをしたのか」と驚かされる。本体の頁数は初版が 1,111 頁、改訂版が 1,113 頁でほとんど変わりはなく、頁当たりの項目数も同様だが、子細に見ると上記の主な改訂箇所のほか、解説にも多少とも手が加えられている。市町村合併で、一つの山に係わる行政区画の数が減った分、そういう余地ができたのだろう。再検討の結果、見出しとしての地名の読みが改められたものもあり、例えば顔振峠は「こうぶりとうげ（かあぶりとうげ）」から「かあぶりとうげ（こうぶりとうげ）」に変わっている。解説文は同じなので、これは初版の校正の見落としということか？もちろん「こうぶりとうげ」の見出しもある。地名よみは、国土地理院採用のもののほか、現地の呼び方も考慮したとのことで、複数あればそれらも取り込まれている。私の地名索引などは自分勝手に読みをつけたものなので、比較のしよ

うもない。長野県の「はくばさん」（白馬山）や「とくもととうげ」（徳本峠）は、地元の人がそう呼ぶのを聞いたことがあるが、まだ資格がないようだ。「浅間山」には「あさまさん」「あさまやま」「せんげんさん」「せんげんやま」と四通りのよみがあり、その内の一つしか用いない地名もあれば、二通りの読みを持つ山もある。「本仁田山」は「ほにたやま」で、「ほんにだやま」ではない。標本の産地をデータ化するとき、とくにローマ字化するとき、頭の痛い問題となる。すでにローマ字化したデータは、改めて和文データを参照せねばなるまい。本書に合わせると「こんな山、ないゾ」ということになり、古い記録まで「訂正」を始める者もいて、どちらが「正確か」という、われわれには無益な論争も起るだろう。こうなると、経緯度のデータがどうしても必要になってくる。

巻頭に日本の活火山一覧（地図つき）と、日本の山地山脈の区分・名称の図がある。付録には、山名の由来、アイヌ語源の山、雪形の山、同名の山、色の山、十二支の山、低い山、深田久弥「日本百名山」、富士山、自然公園と山、があり、山行計画を立てたり、趣味の作品の種を拾ったりするのに役立つだろう。最後に山名の画引き索引がある。

刊行直前に東日本大震災が起った結果、本書の対象となる山や峠の位置は、全国的に不規則なズレが生じたはずだし、今後の復興事業で消失する山もあることだろう。そういう結果が地図に表記されるまでには、少なからぬ年月を要するに違いない。人の寿命には限りがある。出版社は、末永くこの事業を継続してもらいたい。そしてユーザーは、旧版を保存し続けてもらいたい。この種の事典は、新版が出れば旧版はゴミ箱行きという代物ではない。それは地層の一枚として残さねばならないもので、それがあってによって、われわれの歴史を遡ることができるのだ。電子記録は使い勝手という点ではとても便利なものではあるが、いつ失われるかわからないし、記録媒体や OS やコード体系や機器の発達につれて、失われるときが必ず来る。「発達」させる側は「失われなくてはならない、自分で新システムに適應するように更新しないのが悪い」と言うだろう。その上、文字パターンが変えられてしまうと、同じデータなのに違う文字になってしまって、それがどこで起っているのか分からない。まして、ハッカーに内容を改ざんされても気付かない。紙の上の文字

ならば、たとえ日本語がなくなっても、われわれの文化を物語ってくれる。だからできるならば過去にさかのぼって、たとえば明治時代の1:5万図を対象に、こういう事典を作ることも考える必要がある。そうすると「地震山」という「山」でない山があったことを知るだろう。私たちの利用目的からすると、こういう「死んでしまった山」も、位牌のように記録にとどめておいてくれるとありがたいのだが.....[日本山岳会会報「山」No. 800 (2012年1月発行)に掲載したものに補筆。同会の諒解済み] (金井弘夫)

□牧野植物同好会創立100周年記念事業委員会(編): **Makino 100**. B5. 211 pp. 2011. 牧野植物同好会. ISBN no number.

牧野富太郎氏が1911年に東京植物同好会を発足させてから百年となる。同会は1955年から牧野植物同好会と名を更め、横浜植物同好会と並ぶ、わが国で最も歴史の古い植物同好会として活動が続けている。祝辞、第I章:講師からのメッセージ、第II, III章:100年の歩み、第IV章:会員のひとこと・ふたこと、第V章:牧野先生の生涯、第VI章:特別寄稿より成る。とくにII, III, V章は詳細な記録で、目を通しておくといろいろになることが多い。連絡先は牧野植物同好会:195-0064 町田市小野路町1643-2 中嶋英敏氏方 (Tel/Fax 042-735-5396). (金井弘夫)

□鳴橋直弘: **バラ科植物の紫外線写真図鑑 (UV Photos of Rosaceous Plants)**. A5. 451 pp. 2012. ¥2,200+ 税. 大阪自然史センター. ISBN 978-4-902883-09-1 C3645.

420種類のバラ科植物について、同一の花を対象として、紫外線カットフィルターと可視光線カットフィルターをかけて撮影した一対の白黒写真映像が、学名の順に各頁に示されている。対象とされた属は、下表の通り(異名や交配親も含む)である。前書きにごく簡単なまとめがあるが、個々の種類についての論考や詳細な観察記述は伴っていない。私信によると、デジカメの出現と写真フィルムの絶滅の結果、著者が多年にわたって行ってきた研究資料蓄積が続けられなくなったため、定年を機に、とにかくこれまでに得られた結果を公表・保存しておくのが主目的と思われる。

植物の花の色やそのパターンが、われわれ人間の目に映るものと、花粉を媒介する虫や鳥が認識す

るものとは異なることは、既によく知られている、多くの事例が「花生態学」で紹介・解説されている。著者はこれを分類群と関係づけたモノグラフを意図していたが、前記の事情で完遂が難しくなり、急遽とりまとめたものと思われる。いくつかの出版社に断られたそうで、営利会社としてはやむを得ない対応だっただろうが、特定非営利法人になればこそこの出版である。

以前「出版大崩壊」の紹介をしたとき(本誌86(3):192, 2011), IT技術の発達によって出版という記録保存手段が成り立たなくなる上、電子媒体上の記録のみでは「記録」として残るのか?という心配を記したことがあるが、ここにも別な意味での同様な心配があると感じた。咲いている花をそのまま保存することはできないし、押し葉標本や液浸標本にすれば「咲いている状態」ではなくなる。だから本書のように写真で記録するしかない。それを万人に公開しようと本書が作られたわけだが、「もう少し詳しく観察したい」とループでのぞいても、見えるのは網点だけである。印画紙へ焼き付けた映像と本書の映像は、同じであるように見受けられるが、印画紙上の映像はループである程度拡大観察できるが、同じに見える本書の映像は拡大しても無意味である。思いついて、亘理俊次:植物写真集(1961-1964)にループ

属 名	種類数	属 名	種類数
<i>Acaena</i>	2	<i>Mespilus</i>	1
<i>Agrymonia</i>	13	<i>Neviusia</i>	1
<i>Alchemilla</i>	3	<i>Neillia</i>	2
<i>Amelanchier</i>	2	<i>Padus</i>	2
<i>Amygdalus</i>	2	<i>Pentaphylloides</i>	1
<i>Aremonia</i>	1	<i>Photinia</i>	3
<i>Argentina</i>	1	<i>Physocarpus</i>	1
<i>Armeniaca</i>	3	<i>Potentilla</i>	118
<i>Aruncus</i>	1	<i>Pourthiaea</i>	1
<i>Cerasus</i>	23	<i>Prunus</i>	35
<i>Chaeomeles</i>	4	<i>Pyracantha</i>	2
<i>Comarum</i>	1	<i>Pyrus</i>	2
<i>Cotoneaster</i>	2	<i>Raphiolepis</i>	2
<i>Crataegus</i>	4	<i>Rhodotypos</i>	1
<i>Desiphora</i>	3	<i>Rosa</i>	77
<i>Dryas</i>	5	<i>Rubus</i>	112
<i>Drymocallis</i>	2	<i>Sanguisorba</i>	6
<i>Duchesnea</i>	6	<i>Sarcopoterium</i>	1
<i>Eriobotrya</i>	1	<i>Sibbaldia</i>	3
<i>Exochorda</i>	3	<i>Sieversia</i>	1
<i>Filipendula</i>	4	<i>Sorbaria</i>	1
<i>Fragaria</i>	18	<i>Sorbus</i>	6
<i>Geum</i>	21	<i>Spiraea</i>	10
<i>Kerria</i>	2	<i>Stephanandra</i>	2
<i>Malus</i>	4	<i>Waldsteinia</i>	2

を当てて見たら、やはり網点しか見えなかった。大場・宮田：日本海草図譜 (2007) も同様である。原状にできるだけ近く保存するのは、アナログ記録である写真ネガや引き伸ばし印画しかないだろう。本書の映像はフィルムスキャナを経由して電子データとして保存されているそうだが、それはもちろんデジタル記録に違いない。たとえば 500 万画素の密度で記録された映像を、1000 万画素の記録媒体が出来たからとそれに移しても、画像の精細度が増すわけではあるまい。あらためて実物から撮影し直す必要がある。押し葉標本ならば、軟化させて組織を顕微鏡で調べたり、花粉を観察したりすることができるが、本書の目的とするような映像を、過去の標本や映像記録から抽出することは不可能である。標本画像データベースも、記録媒体の精度が高まるたびに、単に移植すれば済むものではないから、あらためて押し葉標本や実物から撮影し直さねばなるまい。パソコンや記憶媒体の能力が半年すれば向上するような時代に、つきあって行けるだろうか？

著者宛に出した手紙の中で、「印刷出版できたからと安心しないで、この本の原稿（つまり引き伸ばし写真）を製本して、標本室のある機関に保存するようにして欲しい」と書き送った。原稿はネガから印画紙に引き伸ばしたアナログデータの筈だから、ルーペで覗いても網点は見えないので、画像データベースの出力よりも有用だろう。それにしても画像データは今後どんな手段で集積保存できるのだろうか？手紙の中で「ネガはもはや記念物でしかない」と書いてしまったが、やはり情報の源として郑重に保存せねばならない、と思い直した。「情報化したら捨ててもよい」ものではない。映像記録保存手段としてもてはやされたマイクロフィッシュやアパーチャーカードは、今後どんな運命をたどるのだろうか？大阪自然史センターの連絡先は次の通り。546-0034 大阪市東住吉区長居公園内 大阪市立自然史博物館内 TEL. 06-6697-6262, URL. <http://www.omnh.net/np/> (金井弘夫)

□森本範正：奈良県樹木分布誌。B5. 284 pp. 2012. ¥1,760 (送料)。ISBN no number.

高校教員を定年退職ののち、19 年をかけて単独で全県 701 地点をくまなく調査した成果である。14-240 頁は 454 種類の水平・垂直分布図が、2.5 万図単位のメッシュで示される。垂直分布は

東経 135 度 45 分の線で東西に分けて、300 m 区切りで示されている。この線は県を 1:2 ほどに仕切っていて、西部の生駒山地、金剛山地、伯母子山地、果無山地と、東部の笠置山地、宇陀山地、竜門山地、台高山地、大峰山地のまとまりを表したもので、単純に一つの垂直分布図にしたり、半分ずつに区切るよりも、分布パタンの解析に有用と思う。分布図と共に、参照した標本のラベルデータが丹念に示されている。これらは公的標本室に収容されているものに限られ、私的標本や視認記録については省かれているので、多くの場合図示された分布点の数よりずっと少ない。これら記録を省かれた資料についても、同様に表示されていた方が、有用性はずっと高いのと思う。他の用途にこの分布図を利用するとき、このままではメッシュサイズの異なる分布図には取り込めないが、少なくとも産地名が示されていれば、なんらかの手段で位置座標を得ることができるからである。試しにいくつかの種について、「CD-ROM 地図で見る日本地名索引」(金井 1998) で調べたら、ほとんどの地名の経緯度 (分) は検出された。こういうところで「私的データ」だからと謙遜してしまうのは、宝の持ち腐れである。野帳の記録などは、その人一代限りで消滅してしまうのだから。もっとも、すべての資料データを表示するとなれば、頁数が膨大になってやり切れないという難点はあるが、同好会誌や学会誌には敬遠されるに決まっているから、自己負担でやる他はない。この点、私がやっている普通植物分布調査でも、同じ悩みを抱えている。

241-264 頁では「奈良県内樹木の分布について」と題して、さまざまな分布パターンについて論じられている。メッシュサイズが 2.5 万図単位だから、ドットの数では全県でもせいぜい 47 点に過ぎないが、実際の調査地点の数は、2.5 万図あたり平均 14.3 地点なので、温度、降水量、地形、生物的攪乱など、さまざまな要因と対応させた分布論が展開されている。一つの県内でもこれだけ議論ができるのだから、近隣地域を含めれば、更に捻りあるものとなるだろう。この意味でも、全資料の提示は有用である。265-273 頁は「分布を攪乱する現在の諸問題」として、開発、移入、食害、遷移などに関する知見が述べられている。春日山原始林の将来は、ナギの純林になってしまうだろうという予測は、議論を呼ぶことだろう。

入手希望者は葉書または FAX で直接下記に申

し込むこと。振替用紙同封で送付する。632-0047
天理市乙木町 559-9 Fax 0743-66-0273 森本範
正氏。
(金井弘夫)

□ 邑田 仁 (監)・荒金正憲・辻 弘文 (著):
APG 分類体系による大分県高等植物目録. B5.
551 pp. 2011. ¥3,500. ISBN no number.

最近急速に目にするようになった, DNA 解析に基づく APGIII 分類体系による, 本邦地域植物誌の嚆矢である. 先に紹介した「館山市の植物」では, 植物目録は従来よく用いられてきた新 Engler 系に準拠していて, これとは別に, APGIII に準拠した科のまとめと配列が示されていた. 本書では本文である植物目録自体が APGIII に基づいて配列されているので, まごつく人も多かろう. 新体系の理解が普及するまでは, 過渡期現象としてやむを得ないと思う. 検索表はない. 各種類の記述は生育地 (低地, 丘陵, 海浜など), 分布量 (希, 普通など), レッドリストレベルと帰化品の表示, 分布の地域区分 (～地域, ～川流域, ～山地など), メモなどである. 具体的な標本データはごく一部にとどまる. 巻頭に監修者による APG 分類体系の解説がある. 別冊として, 荒金氏による『植物目録』は APG 分類体系に変わっていく」と題する, 変動の大きかった

科や属の一覧表がついているが, これはむしろ, 従来の科や属を見出すための索引にした方が便利だったのではあるまいか.

本書を皮切りに, 斬新な分類体系に準拠した地域植物誌の出版が続くことだろう. その際の分類群の配列について, 「これのみが『正しく』これ以外は誤り」という風潮に流れるのは, 用心する必要がある. APG 分類体系は DNA の塩基配列という統一基準によって全植物を仕分けするという点で, 従来の分類体系にはない説得力を持っているが, まだ調整の余地が残されているようだ. 植物目録というものは, ユーザーがそれを便利に使えるというのが目的であり, 系統を論ずる場ではないのだから, 今後起るであろう体系の微調整に一々つきあう必要はあるまい. 議論が落ち着くまで静観するのもよかろう. そうしたところで「旧くて使えない」と, 文句を言われることもないだろう.

あとがきによると, すでに 10 万点を超える標本の蓄積があるとのことなので, そのラベルのデータ化を次の目標にして欲しい. それが最も待たれているものだと思う. 入手については荒金正憲氏 (874-0031 別府市照波園町 10-2. Tel/Fax 0977-66-2938) へ.
(金井弘夫)